

むなかた ひのみさき 宗像と日御碕

式 正 英

福岡と佐賀の県境にある花崗岩山塊の脊振山地の地形概査を了えたのは1年半前（1984年）の暑い日の続いた7月下旬だった。同行したR氏の誘いで、彼の故郷の宗像市（福岡県）を訪ね御宅にうかがった。陽の高い内から御馳走をいただいたが、玄海灘でとれたという真鯛の刺身はこれまでに味わったことがない位の、頗る付きの美味であった。名にしおう玄海灘の荒波にもまれ白身の魚肉がしまり透き通るように見えた。

宗像市に隣接する玄海町の鐘崎（かねざき）や神湊（こうのみなど）は、漁村の中で最も発祥の古いものと言われている。町役場のある田島の近くに宗像大社の社殿があり、こゝの社格は大いに高く「裏伊勢」（伊勢神官にならぶの意が含まれる）の呼称さえもある。この神社の社殿は神湊の海岸から7kmほども入った釣川の沖積低地にあるが、こゝは辺津宮（へつのみや）と言い大社を構成する一部なのである。海岸から11kmほど沖にある大島に中津宮（なかつみや）、更に沖合50kmの処にある無人島の沖ノ島にある沖津宮（おきつみや）の三つの社殿を合わせて宗像大社が構成されている。興味深いことがこの神社にまつわって幾つも秘められているように感ずるのだが、試みにこの離れて鎮座する三つの社殿の位置を、地図の上で結んでみて驚いた。三つが辺津宮から、北西に伸ばした一直線の上に正確に載ってくるのである。しかもそのまゝ伸ばすと朝鮮半島南東端の釜山（ぶさん）に至る。

九州本土から朝鮮半島に至る海上交通の要衝にこれらの社殿が位置している為、古くから海上交通に従事する人々や漁業者の信仰を窺って来たことは容易に窺えるが、その由緒によれば神功皇后の征韓を初め大陸との交渉のある度に重要な役割を果たして来たようである。中でも驚かされることは、宗像大社が自ら1954年以来3次にわたって行った沖津宮の祭祀遺跡の発掘調査の結果の夥しい数の出土品の中に、金銅製の馬具類が含まれて

いたことである。時代は4、5世紀にさかのぼるもので当時新羅^{しらま}で使用されていたものと同じと言う。最近発掘調査のすゝんでいる藤の木古墳（奈良県）ではその色彩石棺の開蓋は1年先に持ちこされたが、殆んど同型の馬具が石棺の周囲から出土し話題を呼んでいる。筆者にとっては神社の神宝館に収められている沖の島の出土品を見た時の強い印象が再びよみがえる思いを味わっている。つまり日本の古代史における朝鮮半島との関わりは、曖昧なものではなくかなり歴然としたものであり、肇国の歴史にそのまゝつながりを持つ様にも思われる程である。

祭神は天照大神の御子神とされる三女神^{たごり}、田心姫神^{ひめ}、湍津姫神^{たぎつひめ}、市杵島姫神^{いちきしまひめ}がそれぞれ別々に祀られて、初めから皇室と深く関わっていると見てよい。こうしたことゝは別にこの暮（1985年）、出雲大社が近くにある島根半島西端の日御碕を訪ねた。鈍色の冬の雲の下で御碕の断崖の岩肌の色は凄絶にも見え、その南にある経島（ふみじま）には白い海猫^{うみねこ}が群れて奇声が充ちていた。経島に接し海に面する山脚の窪みに日御碕神社があった。上下二宮があり上の宮は素戔鳴尊を、下の宮は天照大神を祀るが、下の宮は経島に鎮座していたものを948年に現在地に遷したと言う。社殿は将軍家光によってその後造営された権現造りで緑や朱の色の派手な模様の門や塀で飾られているが、海風にさらされる儘に色が剥げ落ちてやゝさびれた立たずまいである。その経島の裸岩の頂にも小さな島居と祠があって下の宮の元々の様子を類推させる。

境内の社務所に坐っていた宮司に試みに「福岡の宗像神社と何か関係がありますか」と尋ねてみた。即座に「宗像さんはお祀りしてありますよ。あの経島の祠にも」といって同じ祭神の女神の名前を挙げた。これにはいさゝか吃驚させられた。これでは海伝いに渡来した日本人の祖先に想いを馳せない訳にはいかない。沖の島と、日御碕の距

離は240kmほどもあるが、丁度その中間には山口県の孤島、見島（みしま）がある。見島には異色のシーコンボ古墳群があると聞く。古代史ブー

ムの波が急に身近に押し寄せて来た感じだが、これらはすべて筆者にとって自然の成り行きなのである。（1986年1月）

『女性と地理』

井 内 昇

4月から男女雇用機会均等法が施行されることになった。一片の法律で永年の社会的不平等のひとつが解決されるとは思わないが、それへ向けての一步として評価したい。

男女間に差別（segregation）があってはならないが、性差（difference）の存在は否定できぬ事実で、それを認めることが必要な場合もあろう。女子大が必要かどうか性差を認めるかどうかの問題と関わっており、女子大に職を奉ずる身として無関心では居れない。最近の東大新聞（2月4日号）が「何故女子だけの大学が必要か？」という小特集を載せたので、大枚130円也を投じて読んでみたが、教えられることは何も無かった。

看護婦さんは看護夫より病人にとって望ましいと思うし、プロ野球選手はやはり男の仕事である。家政学部が女子大にしか無いのもそれなりの理由がある。それでは、地理は男、女のどちらにより向いているのだろうか。欧米の大学地理学科では、女子学生の割合は20～50%で、この幅を社会環境によるものと考えれば、基本的には地理は男女の別なく学ぶ学科であろう。しかし、世間には「女には方向オンチが多いことからわかるように空間認識能力が欠ける」という俗説があることも事実である。

偶々昨年大学院ゼミで読んだ論文⁽¹⁾に、地理学習における男女差の有無をテーマとしたものがあったので簡単に紹介しよう。

この論文で、筆者は先ず心理学におけるこのテーマの研究にふれ、男が女よりも「空間的能力（spatial ability）にすぐれているとされているが、もしこれが正しければ人文地理学や地図学はこれまで重要な点を見落していたことになるし、もしそれが間違っているならそれを訂正する必要があることを述べ、5種の実験によって心理学の主張

が必ずしもすぐ地理にあてはまらないことを示している。

或る心理学研究⁽²⁾によると、女は男より言語能力が子供の時から勝れていること、男は数学や心象空間に関する仕事での能力が女より高いこと、この空間に関する能力は後天的なものであること、この空間に関する男の能力優位があらわれるのは思春期を過ぎてからであること、が明らかにされ、この限りでは思春期以前には空間的能力で男女間に差はみられない、としている。このMaccobyの他にも同じ傾向を指摘した心理学の研究は少なくない。しかし、著者は、これらの心理学における研究の結果はspatial abilityのうちの或る部分だけについて正しいといえることが見逃されていると指摘する。何よりも先ず問われなければならないのは、心理学者がいう空間的な仕事（spatial tasks）と地理学でいうそれとが同じかどうかであり、心理学者らが挙げるspatial abilityの7つの要素のうち、著者はMcGeeらを引用して「空間の心象化」と「空間的方向性、関係」の2要素が地理学におけるspatial abilityの要素として妥当であると指摘する。著者による5つの実験についてくわしく述べる紙数が無いが、児童から大学生、一般の成人をそれぞれ対象にした地図の利用に関する各種テストの結果からいえることは、年少の児童では男が女よりもspatial abilityで優位が認められること、大学生では地図利用の能力に関して男女間に差はみられなかったこと、これらから、今まで心理学者によって示されてきた空間的能力に関する男女差の存在についての説はそのまま地理の能力に適用することはできない、ということである。（終）

注：

(1) Gilmartin, P. P. 他（1984）“Comparing